

---

# ぼくらの歌は、あわわわぁ～

ハルメク

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ぼくらの歌は、あわわわあゝ

### 【Nコード】

N7527A

### 【作者名】

ハルメク

### 【あらすじ】

・ぼくたちの歌。それは合い言葉に近い。

「よつてえ！ 私は断言するっ！ あの××は肥だめの中から生まれたウンコマンだとっ！ 糞野郎だ！ 露悪を信奉し、周りに毒をまき散らす煙突野郎だっ」

とある町の商店街にあるカラオケ店の１２号室にその声は響いた。マイクで拡張された声は僕たちの鼓膜を破らんばかりの音量だった。今マイクを持って雄弁しているのが斉藤という名前のエロゲーマニアである。××に恐喝紛いのことをされた憂さをこのように大声を出して発散するのが斉藤の

「カラオケ」

であった。そのかわりまったく歌わない。あの歌は例外として。

僕はそんな斉藤を冷めた目で見ていた。この斉藤の弁論だか主張だかは１時間は続く。待っているものにとっては迷惑であり、最初の１０分間は曲選びに使うことができるが１０分を過ぎると曲を選び終えそこからずっと斉藤の主張を聴かねばならないのだった。

「つまり、私たちは立ち向かわねば――」

斉藤の主張が響きわたる部屋の中でソファにきつちりと座って文庫本を読んでいる者がいた。斉藤の声は彼の黙読する力に負けているようだった。彼の名前は熊内という。寄り弁大王の称号を欲しのままにしている読書がフェイバリットの男の子である。

この僕を合わせて3人の男たちは単に斉藤が主張をするからというわけでカラオケに来たわけではない。僕たちはこの場に相応しいことをするために来たのである。

「・・・なのだ！！ はあはあ」

斉藤の主張が終わったようである。彼は額の汗を拭くと僕たち双方の顔を見比べて頷いた。

それは斉藤の合図で、いつも締めくくりにすることを僕たちに促すものだった。

僕は仕方なく立ち上がり斉藤の元へ行った。      しかし熊内だけは文庫本から顔を外さず、ソファに座っていた。

「熊内、最後のやつやるぞ。本は後で良いだろ」

斉藤がマイクを使って言った。しかし熊内は反応しなかった。

「ふいー、活字中毒っていうのも大変だねー」

斉藤が僕を見て言った。僕は曖昧な笑みを浮かべた。

「この集まりにいったい何の意味があるんだ」

熊内が突然口を開いた。顔は文庫本から上げていなかった。

「ぼくたちがここで論じ合ったりして傷の慰めあいをしてもらいつらは変わらずにぼくらを〝狩り〝に来る。弱者は弱者なんだよ」

文庫本のページが捲られた。室内は静かになった。

「何も変えられやしない。それだけ世界が手遅れだってことだよ」

熊内はそれから黙ってしまった。ぼくたちは黙々と読書をする熊

内を眺めていた。

「この悲観論者がっ。悲観的観測しかできねえのかっ。お前こそ真の弱者だっ」

斉藤の声はマイクによって拡張され個室に響いた。

熊内は読書を止めようとはしなかった。

「斉藤、落ち着いて、」

斉藤をなだめようとぼくはそう言った。しかしぼくは斉藤の顔を見て次の言葉を口に出せなかった。

斉藤は涙を流していた。目を熊内に向けて見開いたまま涙を流していた。

「何をされても、自分の中に強い気持ちを持つとけよ。・・・おれらは社会的弱者じゃない！ただ制限された崩壊寸前の仮想社会の中で弱いだけだ！だからこれからこの状態がずっと続くわけじゃない！解ってるのかよ！！熊内！学校では諦めたヤツが負けなんだよ！高みを目指せば良いんだよ！」

ぼくは熊内を見た。熊内の手は止まっていた。しかし顔は下を向いている。

「歌おう、ぼくたちの歌」

ぼくは言った。

斉藤がこちらを見た。

「おれは歌う。おれは弱者じゃない。高みを目指す者だ」

斉藤はマイクを握り直した。ぼくももう一本のマイクを取り口に近づけた。

「1・2・3・・・」

と斉藤がカウントした。そしてぼくたちは歌いだした。

暗い闇が迫り来る

ぼくらの希望を奪うため

闇は変幻自在の体躯を走らせる

強い心根持ち続け、あわわわあゝ

希望の光を追いかける、あわわわあゝ

友よ、勇む前に負けるなよ

挫けそうになれば、この歌を口ずさめよ

ぼくらの歌は、あわわわあゝ

あわわわあゝ

あわわわあゝ

あわわわあゝ

歌い終わると斉藤はマイクを置いて個室のソファへ腰を乱暴に落とした。まだ涙は枯れていなかった。斉藤は腕を組んで下を向いたまま動かなくなった。

ぼくは熊内を見た。熊内の文庫本のページは水分でふやけていた。熊内も泣いていた。熊内の唇は何かの歌を口ずさんでいるように微かに動いていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7527a/>

---

ぼくらの歌は、あわわわあ～

2010年12月10日18時21分発行